

## 市原市東海地区の昔

2020. 10 鎗田功

はじめに

私は小学校2年の夏休みまで市原市海保地区に住んでいました。

当時（昭和20年代）の海保は、典型的な農山村で後背地はよく整備された里山が続き、春はワラビ採り秋はキノコ採り、さらに冬にはカスミ網でのホオジロなどの野鳥捕獲と恵まれた自然の中でお金はなくとも楽しい生活ができていました。

当時から70年近くが経過し私の故郷と云える海保地区が古墳時代から律令時代にかけて、国造（くにのみやつこ）が置かれるなど当時の地方行政の中心的な位置にあったという事を最近知った。

このようなことから、市原市立中央図書館の文献等により海保地区の昔について調べるとともに、久しぶりに現地を踏査してみた。その結果、昔はきれいに整備されていた里山や畑などが、足を踏み込むこともできないような荒地になってしまっていることに驚くとともに、昔の海保を知っている者として、大変残念な感覚を持った。

以上のような状況を踏まえ、文献による昔と現在の海保の状況を簡単なメモとして以下にまとめてみた。

### 1 東海村について

市原市の地域に人々が住み始めたのは何時頃からであろうか。市内では縄文式文化に先行する石器類が散発的に発見されていることから、1万年以前より人類の生活舞台であったようだ。温暖な気候と海・山の幸に恵まれた市原の地は、原始生活にも快適な地であったとみえ、縄文・弥生時代を通じて遺跡が頗る多い。海保地区の諸久蔵貝塚は、縄文時代中期の遺跡といわれている（稿本市原市歴史年表 昭和50年3月市原市教育委員会）。

『市原市将来像策定調査 市原市の今と昔（昭和58年 市原市役所企画部企画課発行）』には、海保地区を含む市原市東海地区について次のように記載されている。

「往古、海上郡(旧上海上国)に属し、その後、郡名も改められ、海保郡と称したこともあったが寛文(1661年)以前に市原郡に合併された。

古来より当地区はかなり栄えていたらしい。

特に、海保地区には、上海上国造の墳墓といわれる八幡台古墳があり、国造が当地に住んでいたという伝説もある。又、公家の台、御腹台と呼ばれる所があり、さらには、海保神社、森巖寺、遍照院等の神社仏閣や出羽三山信仰に基づく県下最大級の大塚(供養塚)があることから往時の興隆の程が窮える。

一方、延喜式内社上総国5座の一つである島穴神社のある島野は、往時の交通の要路で大宝令に基づく駅馬・伝馬の制により駅馬が置かれ、古くから開けたところであった。

島穴神社の祭神志那津彦命は、風の神で日本武尊が走水で暴風雨に遭われた時、この神に助命を祈られたので、無事上陸後これを祀ったといわれる。

源頼朝が下総へ兵を進める時、島穴神社に神田36石を寄進したといわれ、又松平定信は自筆の扁額を奉納した。

廿五里にある宇佐八幡神社にも頼朝伝説がある。同神社明細帳には「鎌倉公甚だ崇敬篤く、年毎に幣帛を奉るを以って使者を遣はさる。当時鎌倉を距ること二十五里、今津井比地なるを以って村名に名づく」とあり、廿五里の地名の由来が鎌倉からの距離によることが窺われる。江戸時代においては、当地区は細かく分割され大部分が旗本の知行や代官の支配地となっていた。

明治に入ると6年の区制実施による大小区分画、11年の郡区町村編制法の施行及び17年の戸長役場所轄区域の更定が行われた際に千種地区の一部村を含めた形で合併・分割を繰り返してきた。

これは千種村の一部村と農業用水利施設の共同利用等において密接な関係を有していたことによるものと思われる。

明治22年の市制及び町村制の施行に伴い、廿五里・野毛・町田・海保・島野・飯沼の6村を合併して東海村が誕生した。その後、昭和28年制定の町村合併促進法に基づき、29年11月五井町と合併した。」

『市原のあゆみ』によると、明治22年の町村制施行時の町村合併は、郡長が立案し、関係町村の合意によって県知事に上申するという順序であったが、必ずしも順調に事が運んだとは言えなかったようだ。東海村ははじめ六郷村(六つの村が一つの村にになったという意)が選ばれたが、東海村に決定した。海上郡の東部に位置するためでしょうか。

また、落合忠一は、『千種の浦と旧千種村の研究(1972. 1)』において、明治22年4月1日施行の町村制において、全国的に新町村名を内定し、各県において適当と認められたものはそのまま告示し決定した(千種村等)。県の納得のいかない村名は改めて訂正を求められた。例えば、「東海村」のごときは、具申書に「五郷村(五カ所の村が合併したということ。正しくは六郷村か)」として提出したところ、県は関係者を呼び出して、海上潟の東にある村ということで「東海村」と訂正された。と記述している。

大正5年発行の『市原郡誌』に記載された当時の東海村状況は下表のとおりで、東海村における海保地区は面積・人口とも大きな割合を占めていた。

現在(2020. 8)と比較すると、市街地に近い島野、飯沼地区の人口は大幅に増加しているが、海保地区、町田地区は減少している。 \* 2020年8月現在(市原市人口統計)

	面積			人口	戸数	人口*	世帯数*
	町	反	畝				
海保	391	1	5	811	149	772	342
町田	45	8	7	211	35	152	62
島野	144	4	7	615	117	3160	1524
野毛	41	2	9	154	30	294	118
飯沼	55	7	2	234	49	2024	956
廿五里	113	6	6	405	83	602	262
合計	792	1	6	2430	463	7004	3264

## 2 海保について

「里伝(言い伝え)によると、大昔海上郡に海上保を置く、後に「上」の字を省いて、海保と称す(但し、海上郡の全く廃せしは、寛文以前にありて市原郡に合併せしなり)今の海保はその跡なり」(市原郡誌・東海村誌云)。

市原の地は、概ね養老川を境にして上海上国造と菊麻国造が置かれた、その時期は4世紀後半の頃。上海上とは上菟上とも書く(国造はくにのみやつこと読み、古代日本の行政機構において地方を治める官職またはその官職についた人のこと。軍事、裁判権などその地方の支配者)。海保の八幡台古墳は上海上国造の墳墓で、国造はこの地に住んでいたとの伝説がある(市原のあゆみ)。国造は早くから中央文化を吸収して、大和政権の勢力拡大の一センターとなっていた。

海保は昔上海上国造が置かれた地。上総における最も旧地たるべき点。国造配置が多い。神武天皇以後における中心の地。成務天皇の頃に国造が置かれた。この地の繁盛は、徳川時代以前に著しい

上海上国造：『国造本紀』によると、成務朝(成務天皇)の上海上国造は「天穗日命(あめのみかのみこと)八世孫忍立多比命(おしたてけたひのみこと)」であるという。阿波(安房)の国造がやはり「天穗日命八世孫弥都呂岐命(みつろぎのみこと)」で、これは兄弟を意識しての表現かもしれないという『古事記上巻』には「天菩比命(あめのほひのみこと)の子建比良鳥命(たてひたりのみこと)は、出雲国造・上菟上国造・下菟上国造・・・の祖である」と記述されており、上海上の国造もまた出雲系であることがわかる。

『国造本紀』は、大倭国造(やまとくにのみやつこ)以下全国で130余りの国造を列举し、それぞれに国造任命時代、初代国造名を簡単に記したものである。それらのなかには和泉(いづみ)、摂津、丹後(たんご)、美作(みまさか)など後世の国司を記載したところもあり、また无邪志(むさし)と胸刺(むさし)、加我(かが)と加<sup>互</sup>(かが)など紛らわしいものもあるが、概してかなり信用できる古伝によっていると思われ、古代史研究の貴重な史料となる。『新訂増補国史大系』所収。

前之園亮は、『市原地方紙研究 N017 上海上と下海上』の中で『国造本紀』には全国に126ないし127の国造が記載されており、房総に存在した国造は安房(阿波)上総(須恵・馬來田・上海上・菊麻・伊甚・武社)下総(印波・下海上)の九つである。また、「海上(うなかみ)」の語源として「海のかなた」を意味するとしているとしている。

### (1) 海保の旧跡

#### ① 海保字公家臺

「この地は城址(海保城址)であったとの感がある。地形高丘に位し、丘上平坦約6,000坪、東南二方は深溪を以て限られ、西南は山林にして大手址(址は城や建物の跡の意)の如く、北方は諸村を直下に臨み遠く内海を眺むを得べし。東部遍照院の傍丘腹において、土中巨石を露わす石棺の如きものは、人工を以て埋めしものに似たり。しかしながら、その名称が伝えられてないことから、むかし上菟上(かみうなかみ)国造云々の説はこの者及び姉崎二子塚等より出たものかもしれない。其の外円形にし



て高さ9尺以上の塚のごときものがありしが、今は崩されて畑になっている。」（市原郡誌）

公家臺（地元では「くげんで」と呼んでいる）は、現在（2020. 9）約半分の面積が雑草や灌木の繁茂する荒地となってしまうている（写真）。

## ② 御腹臺

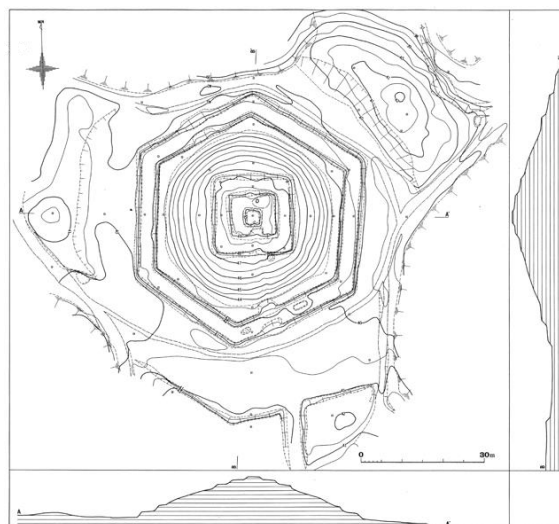
「公家臺の南方溪谷を隔てて一丘陵あり、これを岩戸山と云う、その上を御腹台と云う。高さ凡そ7尺円形の古墳あり、名称と云い必ず昔の貴人の墳墓ならんか、世俗伝えて海保殿塚或いは大昔の上菟上国造の墳墓ならんと、或いは平忠常の骸を葬るところならんと。」（市原郡誌）

右写真は公家臺から見た岩戸方面。



## ③ 大塚山

海保大塚古墳は、東京湾を望む姉崎台地の北東にある海保の地に築造された径60m程の円墳です。姉崎古墳群の一角を占めています。具体的な築造年代は、まだわかっていませんが、規模の大きさや埴輪が採集されないなどの点から、古墳時代終末期における国造の墳墓とも考えられています。この墳丘規模の大きさから、江戸時代には出羽三山信仰の塚として利用されたようです。墳形を見ると、下段は六角形、上段は方形をしています。塚として一部改変されたのでしょうか。ここでは、かつて20年に一度、出羽三山信仰の象徴として、大塚ばやしというお囃子が演じられてきました。



（市原市埋蔵文化財調査センター）

神田ばやしの流れを汲む派手な演出が特徴です。現在は、編成も大規模になり、多くの場所で演じられるようになっていきます。

「公家臺の西約2町（約220m）の谷を隔て平野に突出せる末端の最高丘にあり、高さ三〇余丈（90m余）で六角塚ともいう。塚の周囲は一辺18間づつ六角形をなし五段に築かれる。あたかも高丘に積み上げたようで頂上の老松一株を考えると天恵の勝地を切り崩して作られたものと考えられる。

伝説によれば、数年前まで老松数十株高く雲に聳え遠く千葉町より望むを得たりと、また、袖ヶ浦に漁する船、航行する船舶の目標となったという。

昔より行者の梵天供養せるための供養塚ともいう。残念ながら、塚と云い、供養の場所と云い昔の遺跡ではないようだ。そのような証拠となるものは確認されていない。

とはいえ、この塚及びこの付近の丘陵は大塚山と称し、松原で高いところからは東北一帯の耕地を眼下に眺め、地域を貫流する養老川が五井町に流れ、北方東京の内湾を却下に船の航行等を一望し一幅の絵の如し。ことに西には青波の作るところ富士の高嶺笑

うがごとく、筑波の峰眠るに似たり。もし一点の雲の無い日には、東京品川の黒煙千筋百筋朦朧として波浪の終点を彩る、実に近郷に誇るべき佳景たり。」（市原郡誌）

木對和紀は、『市原市五井・姉崎地区の遺跡と文化財』の中で、「本墳からは埴輪が全く検出されていないことから7世紀以降の埴輪を伴わない首長墓クラスの大円墳ととらえるのが妥当とし、海保大塚を、前方後円墳の築造停止後に成立した終末期の大円墳としてとらえることが可能としている。中央によって前方後円墳の築造に歯止めがかかり、関東での国造制が開始され始めるこの頃、上海上国造はあえて前方後方墳という懐古的な墳形を採用されたことによって、国造墳墓にふさわしい60m級の大円墳を海保の地に築いたものと推定される。大化の改新後に中央から蘇我氏系ではない国造として正式に認定されたことによって、国造墳墓にふさわしい60m級の大円墳を海保の地に築いたものと推定される。」と記述している。

現在の大塚山は、直近まで開発が進み、山に入る道も雑草に覆われており、頂上付近は樹木は伸び放題、雑草は人の背丈を超えるほどに成長してしまっている。

#### ④ 諸久蔵貝塚

「諸久蔵貝塚は、養老川中流域左岸台地上に形成された東西120m・南北100mの馬蹄形を呈する大貝塚であり、市原市域のこの一帯の貝塚群の中では最大規模のものであります。

遺跡の立地は、養老川によって開析された北側から伸びる支谷と、西側の姉崎方面から伸びる支谷がせまる台地上にあたる。これまでに正式な発掘調査は実施されたことはないが、表面採集される遺物から縄文中期後葉から後期全般にかけてのものであることが知られている。」（千葉県文化財保護協会 1983）

「遺跡の現況は大半が山林となっているが、西側の一部が果樹園として利用されており、この部分では貝層の大部分のが削平されてしまっている。また、貝塚を含めた台地一帯は縄文時代を主とした海保野口遺跡として広くとらえられており、貝塚の南約300mの地点が、近年東関東自動車道の建設に伴って発掘調査されている。この調査では、縄文早期の炉穴や中期の竪穴住居跡など多くの遺構などがみついているが、諸久蔵貝塚の時期と直接関わるとみられる遺構や遺物はあまり見つからない。」（財団法人千葉県文化財センター1998）

「諸久蔵貝塚のうち最も貝層が良好に保存されていると見られるのは東側山林内にある箇所と見られ、この一



(中谷方面から見た大塚山)



帯では地表を覆うスギの枯れ枝や草をどけるとすぐに、一面に密度の高い貝層が露呈する状況にある。諸久蔵（もろくぞ）貝塚を現地踏査において、写真に示す1点の貝輪を採集されている。殻の厚さや細部の状況から素材がフネガイ科のサルボウガイのものであると推定されている。」（市原市埋蔵文化財調査センター）

現地を確認したところ、貝塚があったと思われる場所は、現在（2020.10）梨畑と山林となっており倒木と灌木の中に砂混じりで一部貝が確認できた(写真)。

## （2）海保の社寺

### ① 海保神社（八幡神社）

「海保村字八幡台にあり、誉田別尊を祀る村社である。天武天皇2年（674年）8鎮座、ゆえに当地を八幡台という。後に後一条天皇長元4年（1031年）8月再建す。その後、後花園天皇永享元年（1429年）8月15日再建という。

明治元年社名を八幡神社と改称。大正元年より祭日を10月15日に改める。大正4年2月24日同所字山王下村社日枝神社を合祀する。同年11月2日社名を海保神社に改めもる。本社及び拝殿建坪11坪有し、鳥居・狛犬・手水鉢・灯籠各1箇を有し官有地936坪の境内老松の密林を成し地域高爽なり。」（市原郡誌）。



海保神社の現況は、昨年9月の台風の影響などと思われる倒木はある程度片付けられているが、石段や本殿の一部が破損するなど境内全体的に荒廃が進んでいる（2020.9現在）。

海保神社古墳：市原市海保八幡台の神社境内にあり、海保殿/塚古墳、古墳群の通番として海保八幡台2号分とも呼ばれる。墳丘は単純な円形をしており、円墳とも呼ばれる。墳丘の規模は、墳丘の径が31m高さ3mと測られている。基本的には、土を盛られて作られたものなので1500年余の風月に耐えながら自然崩壊もある。海保八幡台古墳群を構成してる。

### 大塚ばやし（千葉県教育委員会 昭和45年1月30日指定無形民俗文化財）

「市原市周辺は江戸時代初期から出羽三山信仰が大変盛んで、海保地区の人々も毎年羽黒山（山形県）などに参拝していた。行程には数十日もかかったが、海保の男は三山詣をしないと一人前に扱われなかった。初めて無事に帰還した者は、「行人」と呼ばれ、その証しに「梵天」という御符をもらう。村の者がもつ梵天が



増えてきたら、これを埋納する「梵天納め」という行事を行った。梵天納めは約20年に1度程度行ったという。この梵天を納める塚が、海保地区の丘陵の突端にあった通称「大塚」である。以前は漁師の海上からの目印ともなっていた。梵天納めの日には全ての梵天を神輿につけ、練り歩く。行列の前後には山車が6基くらい出たが、この山車の上で演じられたのが大塚ばやしであった。囃子は壮麗さや技法を互いに競い合い、それはにぎやかであったといわれている。

しかし、盛大だった大塚の梵天納めも、大正10年を最後に途絶え、これに伴って大塚ばやしも自然に消滅する運命にあった。しかし、第二次大戦後間もなく囃子連ができ、その後保存会が整えられて、現在は海保神社の祭礼日などで定期的に演じられている。

大塚ばやしは大太鼓1、小太鼓2、笛1、鉦1の構成で、動作が大きく派手なのが特徴である。技法的には神田ばやしの系統を引くものである。「五囃子」「岡崎」「大塚囃子」などの曲目があるが、「大塚囃子」の時には全身を大きくゆさぶりながら3色の房をつけた撥で太鼓を打ち、また時折高く投げ上げる「曲撥」も行う。かつての出羽三山信仰の興隆を今に伝える華やかな囃子である。」（千葉県教育委員会ホームページ）

## ② 遍照院

「真義真言宗豊山派に属し、常法談林中本寺（学問修養道場）であり、その創設は弘仁2年（811年）弘法大師の開基で密教道場であった。悲哉（悲しいことに）後数百年を経て法灯消滅の悲運に至る。」（市原郡誌）

市原市歴史年表によると、

弘仁2年（811年）海保の遍照院創建（市原郡誌）。

元慶2年（878年）発教山遍照院、玄正により再建（上総国誌）。

弘長1年（1263年）海保山遍照院、憲深により創建（上総国誌）。

元龜（1573年）東海村遍照院織田信長のため寺祿奪われる（市原郡誌）。

文禄2年（1593年）海保村遍照院焼失する（市原郡誌）。

慶長7年（1602年）海保村遍照院再竣工される（市原郡誌）。

元禄11年（1698年）黄檗宗天外和尚、元禄5年の書に続いてさらに書1巻を海保遍照院に置く（市原郡誌）。

元文4年（1740年）海保村遍照院常法談林所の許可を受ける（市原郡誌）。

明治30年（1897年）海保村遍照院は大本山醍醐寺を離れ豊山派長谷寺の末となる（市原郡誌）。

平成22年（2010年）遍照院本堂大改修落慶法要挙行する。

## 宝物

宝物として：巻物2巻、何れも黄檗宗天外和尚書鳥の子用紙長さ6尺2寸幅1尺

いま、1巻は同宗大通和尚の書鳥の子紙長さ1丈2尺幅1尺

その外、書には物母道人筆、年代未詳1幅、及び永井盤谷筆年代未詳

1幅書には、文殊菩薩の書筆者未詳、1幅の虎の絵年代未詳1幅

他に5～6点、その他古像等多数



#### ④ 森巖寺



「曹洞宗通幻派に属し、君津郡真里谷中本山眞如寺の末寺である。

ご本尊の千手観音菩薩坐像は、中国の僧・蘭溪が日本に渡る際、海難除けとして大宋国の皇帝から賜ったもの。時は鎌倉時代。この仏像と共に諸国を巡っていた蘭溪は、上総国に立ち寄った折、「この地にとどまりたい」と千手観音菩薩が夢で語るのを聞き、



海保・道林の地に臨済宗の泉龍寺を建立、この仏像をご本尊とした…と伝わる。

時は流れ江戸時代、この地は幕府の直轄地となる。姉崎、海保、島野地区を領地とする姉崎藩ができ、徳川家康の孫に当たる松平忠昌が藩主となった。忠昌の父は家康の次男で悲運の武将として知られる結城秀康。忠昌は父の菩提を弔うため寺名を「海保山泉龍院森巖寺」とし、曹洞宗に改宗。姉崎藩は2代13年続いた後に廃藩となったが、森巖寺には三葉葵の紋もまぶしい、秀康と長男忠直(忠昌の兄)、忠昌の位牌が納められ、今日に至っている。」(市原郡誌)

市原市歴史年表によると、

弘安1年(1278年)海保村泉龍寺(後に森巖寺)蘭溪により創建(市原郡誌)

慶長(1596～年)僧日山和尚開山。海保山泉龍寺を改め泉龍山森巖寺となり、今日に至る

慶長14年(1602年)海保村森巖寺開山の僧日山大和和尚死す(歴史年表)

宝永4年(1707年)森巖寺、堂塔火災により焼失すると伝う(伝説)

元文2年(1739年)森巖寺に寺宝新採涅槃像寄進される(市原郡誌)

平成29年(2017年)森巖寺本堂改修落慶法要挙る。

宝物

宝物として：畫に新採涅槃像一幅

三河守の位碑經卷大般若六百卷全部繪旨

木造千手観音菩薩坐像(市原市指定文化財)

森巖寺仮校舎

我が国の近代の学校教育制度は、明治5年8月2日の「学制」発布により始まった。しかし、海保村の如き山間地は教育の何たるも知るものなく学校設立は進まなかった。

このようなことから戸長等連署し、設置を上申し、村中央の森巖寺を以て仮校舎とし、士族を教師として、明治7年3月2日をもって開校す。就学男28名、女1名ありき。明治22年12月13日廿五里と合併し東海尋常小学校と改称し、海保校はその分校となる(市原郡誌)。

謝辞

本資料を作成するにあたって、遍照院住職廣瀬秀明様と森巖寺住職婦人田畑テル子様



両寺院の由来や現況等についてお話を伺った。お二方は私の小中学校の同級生であることから、大変親切の対応いただくとともに、懐かしい昔話などもさせていただいた。

ここに記して深く感謝申し上げます。

#### 参考文献

- 1 市原郡教育委員会：市原郡誌（大正5年7月20日）
- 2 市原市教育委員会：市原のあゆみ（昭和48年3月30日）
- 3 市原市企画部：市原市将来像調査（昭和58年3月）
- 4 落合忠一：千種の浦と旧千種村の研究（1972. 1）
- 5 前之園亮；市原地方紙研究 第17号 市原市教育委員会（平成4年3月）
- 6 木對和紀：平成17年度歴史散歩資料 市原市五井・姉崎地区の遺跡と文化財  
市原地方紙研究協議会（平成17年10月29日）
- 7 市原市教育委員会：稿本 市原市歴史年表（昭和50年3月）
- 8 市原市教育委員会：市原の歴史と文化財（昭和58年3月31日）
- 9 遍照院本堂建設委員会：遍照院本堂大改修落慶法要（平成22年4月3日）
- 10 小林將：森巖寺ものがたり（平成29年11月12日）
- 11 森巖寺：ふれあい（令和2年1月1日・7月1日）
- 12 <https://www.pref.chiba.lg.jp/kyouiku/bunkazai/bunkazai/p321-043.html>
- 13 <https://www.city.ichihara.chiba.jp/maibun/map/Lmap4.htm>
- 14 (<https://www.city.ichihara.chiba.jp/maibun/isekifile204.htm>)

# 海保の旧跡・寺社地図

